

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00832

研究課題名（和文）宮崎龍介を中心とする宮崎家所蔵資料の整理・公開・保存に向けた研究

研究課題名（英文）Research for the organization, disclosure, and preservation of the Miyazaki family's collection of materials centered on Ryusuke Miyazaki

研究代表者

福家 崇洋（FUKE, TAKAHIRO）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：80449503

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：明治期以降、民間の日中交渉を担ってきた宮崎家には、さまざまな貴重な歴史資料が所蔵されている。そのうち、本研究計画では、宮崎滔天の息子・宮崎龍介の関係資料を整理し、資料目録を作成して公開した。あわせて資料調査の過程で発見された諸資料を用いて、日本近現代史に関わる研究報告を行い、学術論文を発表して、日本史研究及び日中交渉史研究に貢献した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大正デモクラシー研究に宮崎龍介は欠かせない人物だが、これまで宮崎家に所蔵される宮崎龍介関係資料はほとんど世にでておらず、先行研究も限られていた。宮崎の資料を公開することは、彼の個人史を詳述するだけにとどまらず、大正期以降日本の学生運動、社会運動、無産政治運動、アジア主義、そして日中交渉史を描き直すことにつながる。この目的のもと、本研究テーマは宮崎龍介関係資料目録を作成して公開し、貴重な資料をもちいて上記の諸研究を前進させ、日本近現代史研究、日中交渉史研究に貢献することにある。

研究成果の概要（英文）：The Miyazaki family, which has been responsible for private-sector Japan-China negotiations since the Meiji period, possesses a variety of valuable historical materials. In this research project, we have organized the materials related to Ryusuke Miyazaki, the son of Miyazaki Touten, and cataloged and published them. In addition, using various materials discovered in the process of material research, we have reported on research related to modern and contemporary Japanese history, published academic papers, and contributed to the study of Japanese history and the history of Sino-Japanese negotiations.

研究分野：日本近現代史

キーワード：宮崎龍介 宮崎滔天 日中交渉 大正デモクラシー 無産政党 インド独立運動 アジア主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の「宮崎家所蔵資料」とは、東京都の宮崎家に所蔵されている宮崎滔天、槌子（滔天妻）、龍介（滔天長男）、燐子（龍介の妻、柳原白蓮）などの関連資料を指す。宮崎家には、明治期から昭和戦後期にわたる、貴重な資料が数多く所蔵されている。

これまで、その一部は『宮崎滔天全集』全5巻（1971～76年、平凡社）や、全国各地で実施された展覧会及びその図録を通して公開されてきた。宮崎家所蔵資料には、宮崎家だけの資料ではなく、孫文、黄興ら辛亥革命に尽力した中国人革命家の書や書簡、犬養毅、古島一雄、吉野作造ら政治家、知識人の書簡などが含まれ、日本近現代史や日中交流史において重要な資料群である。しかし、これらの資料の全体像や詳細についてはほとんど明らかになっておらず、研究に活用しやすい状況ではなかった。

申請者は、2018年4月から2022年3月までの科学研究補助金基盤研究C「宮崎家所蔵資料の整理・公開・保存に向けた基礎的研究」で、宮崎家所蔵資料の調査に取り組みはじめた。作業を進めるにあたり、2つの方向性を考えた。第一は、比較的分量が少ない宮崎滔天関係資料から整理することである。宮崎家所蔵資料の中では龍介関係資料が多く、研究期間の3年ですべて目録化することはできなかったため、まずは滔天関係資料に絞る必要があった。作業の内容は、資料を整理して目録化して公開すること、中性紙封筒に入れて保存をはかることである。

これは各年度に作業を行い、最終年度に総合的な目録を作成し、「宮崎家所蔵宮崎滔天関係資料目録」として京都大学人文科学研究所紀要『人文学報』117号（2021年5月）に掲載されたほか、そのうち貴重な資料を翻刻して「資料紹介 宮崎家所蔵宮崎滔天関係資料」として『人文学報』119号（2022年6月）に掲載した。今回の調査で『宮崎滔天全集』未収録の新出資料を発見することができ、それを目録として公開できたことは大きな学術的意義があったと考えている。

第二は、この資料整理作業と併行して、龍介関係の貴重な資料を用いることで、1920、30年代の社会運動や無産政党に関する論文を執筆・投稿し、資料に学術的な価値を付加していくことに取り組んだ。折良く、法政大学大原社会問題研究所の無産政党資料研究会から招待を受けて、同研究会の報告や特集寄稿論文、関連雑誌の翻刻などの際に、宮崎家所蔵資料を活用して、新しい歴史的事実を明らかにすることができた。

以上の科学研究補助金基盤研究C「宮崎家所蔵資料の整理・公開・保存に向けた基礎的研究」の成果をふまえて、今回の研究課題「宮崎龍介を中心とする宮崎家所蔵資料の整理・公開・保存に向けた研究」では、宮崎家所蔵資料のなかでもっとも分量が多く、かつ日本近現代史研究および日中交流史研究に深く関わる宮崎龍介関係資料の整理に取り組みはじめたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の全体の目的は、宮崎家所蔵資料の目録作成・公開・保存の各作業を行うことにより、国内外の歴史研究者が宮崎家所蔵資料にアクセスできる環境を整える準備を行うことである。

「宮崎家所蔵宮崎滔天関係資料目録」の作成、資料の復刻を通じて再確認できたことは、宮崎家所蔵資料は日本近現代史研究にとどまらず、日中交流史研究においても重要な意味を持つことである。このため、今回の研究課題によって、他分野の研究者、未来の研究者が宮崎家所蔵資料を活用できる環境を引き続き整え、日中歴史研究全体のボトムアップに寄与したい。

以上から、本研究の独自性は、これまで断片的に世に出されてきた宮崎家所蔵資料の全貌を明らかにしていくことができることであり、これを資料目録として世に出しつつ、今後も永く活用されるように資料の保存処置を施していくことである。基礎的研究ながら、以上の方法がもっとも日中の学術研究全体に貢献しうると考えている。

今回の研究課題では宮崎家所蔵資料の中核をなす宮崎龍介の関係資料を対象とした。宮崎龍介は、東京帝国大学在学中に吉野作造に師事し、東京帝大新人会の創設に関わったほか、1920年代から30年代初頭にかけて無産政党幹部として活躍した。1930、40年代になると、中野正剛らが結成した東方会に入会し、民族解放運動に取り組んだ興味深い経歴を持つ。中国との関係がよく言及される宮崎家だが、戦時期から戦後にかけてインド独立運動にも関わったことは興味深い点である。戦後は、いち早く中華人民共和国を訪問して日中友好事業に尽力した一方、国内では弁護士として護憲運動などに携わった。

このように、宮崎龍介の軌跡を一次資料から明らかにすることは、「大正デモクラシー」と戦時体制の関係を再考するだけでなく、左右に分断された「一國史」的な日本政治史、日本社会運動史を東アジアへと知見を広げながら描き直す可能性を秘めている。とくに、龍介は、滔天の長男として1920年代から戦後にかけて中国の国民党、共産党双方の関係者と交流があり、これまで先行研究が手薄な、戦前期の社会運動と中国の関係を未発掘の資料から明らかにできることから、日中交流史研究にも大きく寄与することができる。

3. 研究の方法

3年を予定する本研究課題において、各年度の作業内容・体制は基本的に同じである。作業内容は、宮崎龍介関係資料の整理、同資料の目録化及び貴重資料の公開、資料保存である。まず量自体が膨大な数にのぼるため、全体像を把握して概要を作成しつつ、目録を作成していく。そのうち貴重な資料は資料紹介をしたり、学術論文で位置づけたりすることでその重要性を訴えていく。以上の作業と同時並行で、もっとも時間・労力が必要となる目録の作成を3年の期間で行う。また、これらの資料は未永く保存される必要があるため、中性紙箱・封筒で保存して資料の劣化をおさえたり、修復作業を業者に依頼したりする。作業の体制は、日中交流史及び中国共産党研究に取り組んでおられる石川禎浩氏に研究分担者になっていただき、宮崎龍介関係資料における中国関係資料の整理につき助言を得ながら作業を進めた。

4. 研究成果

本研究課題は3年間であったため、各年度に分けてその成果を説明する。

初年度の2021年度は、宮崎家に通って資料整理と目録化の作業を行いつつ、広い視野から宮崎龍介の思想と軌跡を捉えるために、同時代の「大正デモクラシー」について歴史学及び史学史の視点から検討を加えた。彼の略歴で示した通り、「大正デモクラシー」概念と宮崎龍介の思想・運動は密接な関係がある。

研究報告としては、京都大学現代史研究会で2021年7月に「大正デモクラシー論再考 戦後民主主義との関連から」の題で報告し、戦後歴史学との関係で大正デモクラシー研究の歴史のかつ現代的な意義を検討した。これを原稿化して投稿したのが「大正デモクラシー論再考 戦後民主主義との関連から」『二十世紀研究』22号(2021年12月)である。

またこれ以外の論稿として、戦後の日本で大正デモクラシー研究を牽引した松尾尊兌氏と三谷太一郎氏の研究を論じた「松尾尊兌と大正デモクラシー研究」『人文学報』117号(2021年5月)、「三谷太一郎と『大正デモクラシー論 吉野作造の時代とその後』」『日本史研究』708号(2021年8月)をそれぞれ発表した。以上は史学史研究からの検討にとどまるが、大正デモクラシーの時代を歴史学の方法で論じた「社会運動の諸相」「国家改造運動」筒井清忠編『大正史講義』(筑摩書房、2021年)を発表して、大正時代の思想と社会を多面的に検討した。

研究分担者の石川禎浩氏は、宮崎龍介がその活動の一部に関わった中国共産党の結党に関して、論稿「記念と展示に見る中国共産党第一回代表大会」(『學士會会報』949号、2021年7月)を発表した。

2年目となる2022年度は引き続き、宮崎家に通って資料整理と目録化の作業を行いつつ、宮崎龍介関係資料を用いた研究を実施した。

2022年7月8日に京都大学人文科学研究所「20世紀中国史の資料的復元」共同研究班(石川氏主宰)で「山東出兵前後の無産政党」の題で報告を行なった。これは田中義一外交期の1920年代末頃において無産政党がいかなる対中関係を構築しようとしたかを述べたものである。この歴史的背景をおさえたうえで、7月23日、9月10日の日本史研究会大会共同研究報告第1回、第2回準備会、10月9日の同研究会大会において「戦間期中日交渉における宮崎龍介」と題して報告した。

これら一連の報告で、1910年代末から30年代初頭において宮崎龍介が父滔天の跡を継いで、対中関係でいかなる役割を果たしていたかを歴史的に跡づけ、その独自のアジア主義と運動を実証的に浮き彫りにした。また、宮崎龍介の思想との比較もかねて、2023年3月にドイツ・ハイデルベルク大学日本学研究所に招かれて「大川周明と国家改造運動」の題で講演と意見交換を行ない、大正・昭和期のアジア主義に対して理解を深めた。

以上の研究報告以外では、上記の日本史研究会大会に対応する共同研究報告を原稿化した論文「戦間期中日交渉における宮崎龍介」が『日本史研究』727号(2023年3月)に掲載された。これとあわせて、明治期から戦前昭和期の思想史をテーマとコラムでまとめた『思想史講義』明治篇、明治篇、大正篇、戦前昭和篇4冊(筑摩書房、2022~2023年)を山口輝臣氏(東京大学)とともに編纂した。この一連の作業によって近現代日本の思想と社会を俯瞰的にみることにつながり、とりわけ大正期から満洲事変期までの宮崎龍介および無産政党の思想と運動に対する理解を深めることができた。

同時に、「無産政党の台頭と挫折」(筒井清忠編『昭和史研究の最前線 大衆・軍部・マスコミ、戦争への道』朝日新書、2022年)で東京帝大新人会から無産政党にいたる日本近代史の軌跡を、「樽井藤吉の軌跡と思想」(奈良県立大学ユーラシア研究センター編『奈良に蒔かれた言葉と思想 II 近世・近代の思想』京阪奈情報教育出版、2022年)で近代日本のアジア主義に関する研究もすすめて、宮崎龍介の思想と運動を多面的に理解しようとした。

最終年度となる2023年度は、宮崎龍介の旧蔵で、彼が生前に関わった各無産政党に関する資料を整理・目録化し、『人文学報』に「宮崎家所蔵宮崎龍介関係資料目録」の題で投稿した。目録は現在校正中で、2024年6月末頃の刊行を予定している。同資料は本邦未発表となる資料も含まれる貴重な資料群であり、その公開は本研究課題のまとめに相当する成果となる。

これ以外にも、宮崎龍介に関する研究を推し進めた。孫文が設立した中山大学の人文高等研究院の招待を受けて、シリーズ講演会「中日近現代哲学思想的交匯」に講師として参加し、「中国革命にみる日中交流」の題で宮崎滔天・龍介親子の日中交流事業について講演を行った。

また、上記の宮崎龍介旧蔵の無産政党関係資料を一部用いながら、宮崎も参加した社会大衆党

の結党過程をまとめた「社会大衆党結党過程の検討」を法政大学大原社会問題研究所・榎一江編著『無産政党の命運 日本の社会民主主義』（法政大学出版局、2024年）に発表した。旧来の社会大衆党研究で見すごされてきた結党経緯を多面的に明らかにすることで、社会大衆党観の転換を提起した。以上の成果を含んで、研究期間全体では、宮崎龍介関係資料の整理と目録化、公開を推し進めつつ、これまで研究の乏しかった宮崎龍介に関する新たな側面を実証的に提示し、日本近現代史研究、日中交流史研究に位置づけることを目指して研究を行ってきた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 -
2. 論文標題 樽井藤吉の軌跡と思想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 奈良県立大学ユーラシア研究センター編『奈良に蒔かれた言葉II 近世・近代の思想』（京阪奈情報教育出版）	6. 最初と最後の頁 177 - 240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 727
2. 論文標題 戦間期日中交渉における宮崎龍介	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 127 - 157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 -
2. 論文標題 反ファシズム人民戦線論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口輝臣・福家崇洋『思想史講義』戦前昭和篇（筑摩書房）	6. 最初と最後の頁 241 - 258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 -
2. 論文標題 国家社会主義と満洲事変	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口輝臣・福家崇洋『思想史講義』戦前昭和篇（筑摩書房）	6. 最初と最後の頁 107 - 121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 -
2. 論文標題 無産政党の台頭と挫折	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 筒井清忠編『昭和史研究の最前線 大衆・軍部・マスコミ、戦争への道』（朝日新書）	6. 最初と最後の頁 63 - 90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 -
2. 論文標題 堺利彦ー社会主義運動から部落問題をとらえる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 朝治武・黒川みどり・内田龍史編『非部落民の部落問題』（解放出版社）	6. 最初と最後の頁 53 - 72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Romaric Jannel, Fuke Takahiro	4. 巻 7
2. 論文標題 (翻訳) Miki Kiyoshi "La forme marxienne de l' anthropologie"	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 European Journal of Japanese Philosophy	6. 最初と最後の頁 411 - 445
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川禎浩	4. 巻 -
2. 論文標題 第五章 政治史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岡本隆司・吉澤誠一郎編、袁広泉・袁広偉訳『近代中国研究入門』（当代世界出版社）	6. 最初と最後の頁 126 - 147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川禎浩	4. 巻 892
2. 論文標題 高橋伸夫著『中国共産党の歴史』書評	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 34 - 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川禎浩	4. 巻 -
2. 論文標題 「十月革命の砲声がとどろき」 アジアの共産主義運動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 永原陽子・吉澤誠一郎編『岩波講座 世界歴史 20 二つの大戦と帝国主義! 20世紀前半』(岩波書店)	6. 最初と最後の頁 227 - 228
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川禎浩	4. 巻 49
2. 論文標題 大沢武彦氏の書評に対するリプライ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国現代史研究	6. 最初と最後の頁 63 - 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川禎浩	4. 巻 -
2. 論文標題 戦前日本の毛沢東観	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口輝臣・福家崇洋『思想史講義』戦前昭和篇(筑摩書房)	6. 最初と最後の頁 236 - 239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 862
2. 論文標題 書評 黒川伊織著『戦争・革命の東アジアと日本のコミュニスト：1920-1970年』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 101-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 136(1)
2. 論文標題 満洲事変と十月事件：昭和史ダークサイドの淵源として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央公論	6. 最初と最後の頁 62-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 708
2. 論文標題 三谷太郎と『大正デモクラシー論：吉野作造の時代とその後』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 99-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 117
2. 論文標題 松尾尊兌と大正デモクラシー研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 27-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福家崇洋	4. 巻 22
2. 論文標題 大正デモクラシー論再考：戦後民主主義との関連から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 二十世紀研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川禎浩	4. 巻 949
2. 論文標題 記念と展示に見る中国共産党第一回代表大会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 學士會會報	6. 最初と最後の頁 21-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 福家崇洋
2. 発表標題 戦間期日中交渉における宮崎龍介
3. 学会等名 日本史研究会大会共同研究報告 近現代史部会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福家崇洋
2. 発表標題 山東出兵前後の無産政党
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所「20世紀中国史の資料的復元」共同研究班（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福家崇洋
2. 発表標題 「不敬」のプリズムー大川周明と 紀元二千六百年
3. 学会等名 人文研アカデミー2022シンポジウム「近現代天皇制を考える学術集会ー「建国記念の日」に問う」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福家崇洋
2. 発表標題 天平文化顕彰の思想
3. 学会等名 奈良県立大学 近世・近代の思想研究会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 福家崇洋
2. 発表標題 大川周明と国家改造運動
3. 学会等名 Institut für Japanologie der Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石川禎浩
2. 発表標題 齒車として生きる 1940年代の中国革命運動における組織と個人
3. 学会等名 国際シンポジウム「革命における公論と暴力 体制変革のグローバル比較」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 ISHIKAWA Yoshihiro
2. 発表標題 Living as a Cog in the Machine: A Way of Life in the 1940s.
3. 学会等名 Digital Conference "Living the Socialist Modern" The Chinese Communist Party at 100: Global and Interdisciplinary Perspectives (Heidelberg University 主催) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石川禎浩
2. 発表標題 “四大文明”説の形成與伝播 跨世紀の対話
3. 学会等名 国際研討会「百年中国與世界：跨学科の対話」(北京大学人文社会科学研究院 等主催) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石川禎浩
2. 発表標題 建党百年の回首：重思《中国共産党成立史》
3. 学会等名 胡華大講堂第34回講義(中国人民大学中共党史党建研究院等主催) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 山口輝臣、福家崇洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 311
3. 書名 『思想史講義』大正篇	

1. 著者名 山口輝臣、福家崇洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 327
3. 書名 『思想史講義』明治篇	

1. 著者名 山口輝臣、福家崇洋	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 325
3. 書名 『思想史講義』戦前昭和篇	

1. 著者名 山口輝臣、福家崇洋	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 339
3. 書名 『思想史講義』明治篇	

1. 著者名 石川禎浩著、艶丹訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 台湾商務印書館	5. 総ページ数 351
3. 書名 中国共産党百年史	

1. 著者名 筒井清忠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 494
3. 書名 大正史講義	

1. 著者名 石川禎浩	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 中国共産党、その百年	

1. 著者名 石川禎浩	4. 発行年 2021年
2. 出版社 香港中文大学出版社	5. 総ページ数 517
3. 書名 中国共産党成立史（増訂版）	

1. 著者名 石川禎浩	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北京大学出版社	5. 総ページ数 286
3. 書名 “紅星” 世界是如何知道毛沢東的？	

1. 著者名 ISHIKAWA Yoshihiro	4. 発行年 2022年
2. 出版社 The Chinese University of Hong Kong Press	5. 総ページ数 333
3. 書名 How the "Red Star" Rose: Edgar Snow and Early Images of Mao Zedong	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	石川 禎浩 (Ishikawa Yoshihiro) (10222978)	京都大学・人文科学研究所・教授 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------